

中山間地域の煎茶園で少肥栽培に適した品種「ふうしゅん」			
[要約] チャ品種「ふうしゅん」は、窒素施用量を削減した場合の減収程度が「やぶきた」、「さえみどり」、「おくみどり」及び「めいりよく」に比べて小さく、少肥栽培下での生育、収量性に優れ、 <u>少肥栽培</u> に適した品種として有望である。			
農業総合センター・茶業指導所・茶振興担当		[実施期間] 平成11～15年度	
[部会] 農産	[分野] 高品質化技術	[予算区分] 国庫	[成果分類] 指導

[背景・ねらい]

硝酸性窒素が環境基準に追加されたことに加え、滋賀県は琵琶湖を抱えているため、農業が流域の水質に与える影響は重大な課題であり、窒素負荷軽減技術の確立が急務である。

そこで、煎茶園における窒素低投入型生産技術を確立し、技術の普及を図るため、本県内の栽培品種及び有望品種の中から、少肥栽培適応性の高い品種を選定する。

[成果の内容・特徴]

チャ品種「やぶきた」、「さえみどり」、「おくみどり」、「めいりよく」及び「ふうしゅん」が、定植1年目から定植6年目までの間、年間窒素施用量を削減して栽培した場合に受ける生育、収量及び成分への影響の程度に基づき、少肥栽培適応性を評価した。

「ふうしゅん」は、年間窒素施用量を削減すると、一番茶収量が31%減少するが、他品種が50～64%減少するのに比べると、その程度は軽微であり(図1)、少肥栽培下での収量も多い(図2)。

「ふうしゅん」は、年間窒素施用量を削減すると、二番茶収量が60%減少するが、「やぶきた」以外の品種が70～75%減少するのに比べると、その減少程度は小さい(図1)。

「ふうしゅん」は、年間窒素施用量を削減すると、春整枝量が47%減少するが、他品種が62～86%減少するのに比べると、その程度は軽微であり、生育の低下程度は小さい(図1)。

「ふうしゅん」は、年間窒素施用量を削減すると、全窒素含有率及びアミノ酸含有率がそれぞれ15%、35%低下し、カテキン含有率が9%上昇するが、その程度は他品種と同等である(図1)。

[成果の活用面・留意点]

新植、改植茶園に導入する品種候補とする。

「ふうしゅん」は、摘採期が「やぶきた」より3日程度遅い中晩生種で、極めて多収である。

[具体的データ]

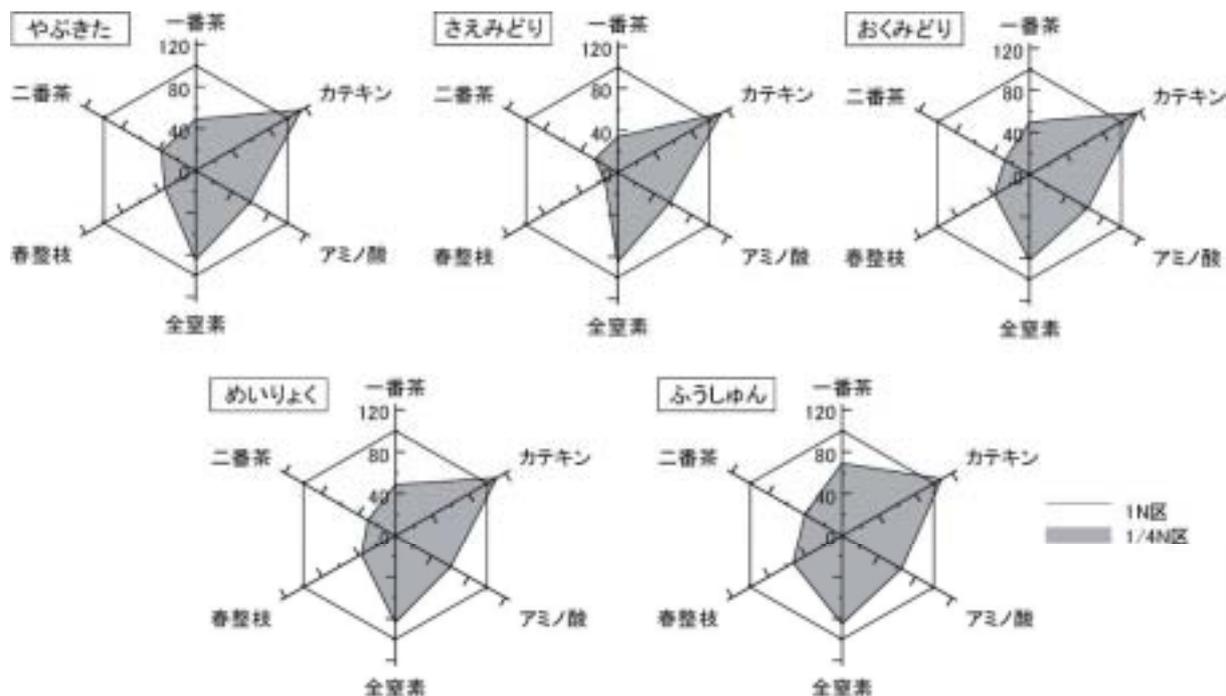


図1 窒素施用量の削減による収量及び成分含有率の変化

- 1) 1N区は年間窒素施肥量80g/m², 1/4N区は20g/m².
- 2) 一番茶, 二番茶及び春整枝は, 収量(g/株)の1N区に対する相対値(5ヶ年平均, 二番茶のみ4ヶ年平均). 全窒素, アミノ酸及びカテキンは 一番茶の含有率(%)の相対値.

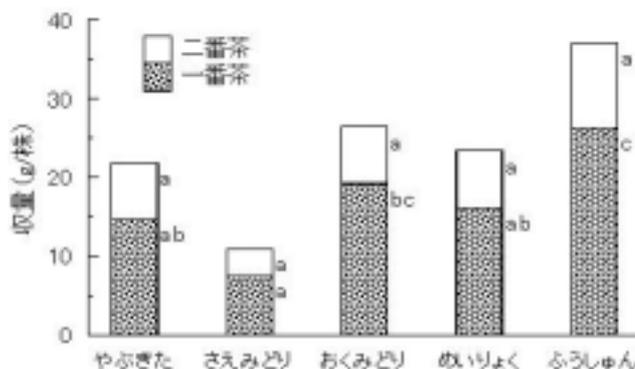


図2 少肥栽培下における収量の品種間差

- 1) 年間窒素施肥量20g/m²での収量
- 2) 一番茶は平成11(定植2年目)~15年度(定植6年目)の5ヶ年平均. 二番茶は平成11~13年度と平成15年度の4ヶ年平均.
- 3) 図中の英文字が同一茶期で異なる場合は, Ryan法により5%水準で有意差が有ることを示す.

[その他]

- ・ 研究課題名
大課題名: 消費者等の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発
中課題名: 安全・安心・高品質な農畜産物の生産技術の開発
- ・ 研究担当者名
近藤知義 (H11~15)
- ・ その他特記事項
平成15年度近畿中国四国農業研究成果情報に採択